

青戸と私

栗原尚子

葛飾区、青戸は現在の私の居住地である。住居表示では青戸となっているが、本来は戸ではなく砦であるが、今では京成線の駅名にその名残をとどめているに過ぎない。鎌倉時代、青砥藤綱の在所であったところで、藤綱は、小川に落とした3文の小銭をそれ以上の費用をかけて回収し、「そのままにしておけば、それは死金。たとえ費用がかかろうとも、その費用と拾い上げた金は世に役立つ。」と言ったという逸話で知られた。しかしこの逸話も、寂れた藤綱神社と共に忘れられている。

「現在の」居住地と書き出したが、物心ついてからおよそ40年この方、この地にへばりついているというのが真実である。かつて、お茶大のクラスメートに「名前も、住所も変わっていないのはあなただけよ。」と言われてからも、すでにかなりの年月が経っている。この間、居を移したのは、一橋大学に勤め始めてから間もなく、大学紛争の真っ只中、1週間に2日から3日、国立の助手仲間のところを泊まり歩いた結果、家人も呆れ果て、下宿が許可された1年と、それに続くメキシコ留学の1年、そして一橋大学時代の最後、よる年波には勝てず、2時間の通勤時間に耐えられなくなり2年間国立に住んだ、計4年間のみである。青戸周辺で4回、住む家は変わったものの、いずれも歩いて10数分の距離範囲を移動したに過ぎない。

40年近く、青戸及びその周辺の変化を目の当たりにしてきたのにも関わらず、どれだけこの地について地理的情報を蓄積しているかとなると心細い限りである。昨年の秋、偶然、青砥駅のホームで竹内敦彦先生とお逢いした。そもそもこの沿線で、仕事の関係者に出逢うことなど皆無であるので、ビックリしたが、この竹内先生は葛飾区との関わりが深く、その情報量たるや私など及びもつかない。束の間の道連れではあったが、その間にいろいろ講義していただいた次第。私と居住地である地域社会との関係が、仕事場との間を往復する単なる時に過ぎないのを改めて実感した。

これまで、「だいたい、この地を居住地として自ら積極的に選択したわけではない。もっと生活環境の整備された住み安い所がある。その機になったら、いつ

でも出ていく」というくらいにしか考えていなかったのである。両親がこの地を離れるのを拒否する以上は、いたしかたないこと。しかし、最近、このような地域社会との関わりに些か自分でも疑問が出てきたのである。そろそろ自分の老年期が、これからの人生を考えるについて無視できなくなってきた世代に突入したためからかもしれない。

確実にやってくる高齢化社会の中で老年期を豊かにとはいかなくとも人並に過ごすための生活環境設備が、これからどの程度完備されるのかわからない。しかし、いくら生活環境設備が整備されようとも、人間に関わる問題は、最後には人間でしか対応できない、と言うのが、最近の痛切なる実感である。そうなる、最も重要になるのは地域社会における人的ネットワークである。巨大化する一方の東京では、仕事を通じて作り出された人的ネットワークは、地域社会における日常生活ではほとんど機能しない。巨大都市における地域社会の崩壊を云々したところで問題の解決にはならない。そうなると、私のような仕事人間の従来の生活スタイルそのものを見直しこそが、必要とされているのであろう。このような点から、昨年、3年生の人文地理のゼミナールで輪読したR. J. Johnston “On Human Geography” (Basil Blackwell, 1986, 198p.) は、参考にできる示唆を含んでいる。彼のこれまでの地理学者としてのキャリアにおける人文地理学の理論的基礎を再検討し、新たな地平を再構築することを試みたものではあるが、地理学者としての社会的実践を踏まえた理論の構築を前提としており、地域社会の問題への積極的関わりを主張していることも、本書の特徴の一つとなっている。近年の社会科学における“local community”への注目と機を一にするものではあるが。

Johnstonのレベルからはかけ離れるが、ギリシャやスペインのバルではないけれども青戸のカフェテリアでの人的つながりなども、日常生活における清涼剤となり、私を青戸から案外離れがたくしている一つの要因となっているのかも知れない。